特　集　2

Law School Admission Test に関する米国訪問調査報告

研究開発部試験臨床研究部門　椎　名　久美子
研究開発部試験臨床研究部門　柳　井　晴　夫
東京大学大学院・総合文化研究科　繁　桝　算　男

1．はじめに

司法改革の一環として法曹専門家の養成に特化した実務的教育を行う法科大学院が平成16年４月から設立される。この法科大学院入学者の選抜に当たっては，公平性・開放性・多様性を確保するために，全受験者に対して法学の知識を前提としない統一的適性検査を実施して，判断力・思考力・分析力・表現力の資質を測定することが望ましいとされている［1］。上記の動きに鑑み，筆者らは，米国のロースクールの入学者選抜方式や Law School Admission Test（以下，LSAT と略）についての調査のために，2002年10月に米国の Law School Admission Council（LSAT の実施母体である非営利私企業，以下 LSAC と略）とロースクールを訪問した。調査には，筆者らの他に，鬼島康宏（大学入試センター理事），根岸正巳（大学入試センター総務課），小山田享史（文部科学省）各氏が同行した。

訪問先のロースクールとして選んだのは，コロンビア大学，ジョージ・ワシントン大学，ジョージタウン大学，ハーバード大学，ペンシルバニア大学の５つのロースクールで，いずれも高い評価を得ており，非常に高倍率の入学者選抜を行っている。本稿では，LSAT の概要やロースクールの入学者選抜プロセスでの LSAT の用いられ方を中心に，５つのロースクールにおける事例を交えながら報告する。

2．LSAT の概要［2］

LSAC には201校（米国186校，カナダ15校）のロースクールが加盟しており（2003年９月現在），加盟校は，志願者に LSAT の受験を課して，入学者選抜の資料の１つとしている。LSAT は，LSAC によって年４回（６月，10月，12月，２月）実施されている。2002年６月から2003年２月までの１年間の延べ受験人数は14万8千人にのぼる。

LSAT で測定しようとするのは，学部で受けた教育の結果として「獲得された」アカデミックスキルである。「獲得された」スキルを測定するという意味では，LSAT は“aptitude test”（適性試験）ではない。LSAT の目的は，特定の科目の知識ではなく，ロースクールに入学してからの勉学に必要とされる読解や推論のスキルを測ることである。

LSAT は，読解，分析的推論，論理的推論の３種類の多肢選択式セクションと，小論文から構成される。多肢選択式セクションに関しては，LSAC によって120～180の範囲に標準化された得点が算出されるが，小論文に関しては LSAC では採点を行わず，各ロースクールが評価を行う。限られた時間内での手書きによる回答のため読みづらい，という理由で小論文を選抜資料として用いないロースクールもあれば，制限時間のもとでの作文能力を評価するのに用いるロースクールもある。各ロースクールに問い合わせれば，LSAT の小論文を選抜の際の評価に使うかどうかを知ることが可能である。

LSAT の得点は，各実施回の得点が互いに比較可能になるように尺度化されている（等化と呼ばれる統計的調整による）。各ロースクールには，学部成績などと共に，志願者が受験したすべての回の LSAT 得点とそれらの平均点が通知される。LSAC は，入学後の成績の予測には，最高点や最低点よりも平均点を用いるほうが良いとしている［3］。

LSAC では，LSAT 得点を等化するために，実際の試験の際に採点対象外の問題を埋め込んで出題し，それらの難易度などの項目特性をあらかじめ推定しておく。難易度データの得られた問題を再び採点対象として出題することで，異なる問題冊子の得点が互いに比較可能になる。難易度データ収集のためには，採点対象外の問題がどれか，受験者に区別出来ないようにしなければならない。よって，LSAT の問題冊子は，会場から持ち帰ることが禁じられており，厳重な管理の下にすべて回収される。年４回の実施回のうち３回については，試験終了後に問題が公開されるが，その場合でも採点対象外の問題は除いて公開されている。同じ問題が採点対象として再び出題されるまでの期間や多種類の問題冊子の配布地域をランダムにすることで，試験問題の漏洩は防げると考えられている。

3．入学者選抜プロセスとLSAT

LSATの他に要求される選抜資料としては，大学在籍中の成績（以後，学部成績と呼ぶ），パーソナル・ステートメント，推薦状がある。学部成績からは，取得した単位の評価値（A～F，1～5など大学によって評価システムが異なる）を「4.0スケール」と呼ばれる共通尺度に変換した値の重み付き平均(Grade Point Average，以後，GPAと呼ぶ）が算出される。パーソナル・ステートメントは，志望動機に関するエッセイと身上書を合わせたような内容の作文である。志願者が選抜資料をLSACに送付しておくと，LSACから志願先のロースクールにこれらの資料が送付されるシステムになっている。

入学者選抜に際して，各ロースクールが非常に重視している点が2つある。1つは，入学者の多様性を確保することである。ロースクールでは討論形式の講義で学生が互いに学ぶことが多いので，性別，出身地域，民族，学部での専攻，経済状況，個人史，どの法律分野に興味があるか，などの点で，入学者全体が多様な社会の縮図を反映していることが望ましいと考えられている。そのため，学部成績をはじめ，パーソナル・ステートメントや推薦状を吟味して，多様な学生を入学させようとする。もう1つは，ロースクールで成功するための潜在的能力を持っていることである。LSAT得点や学部成績が悪い人でも，それ以外の観点において優れた人なら入学させるべきだ，という考え方は，入学者選抜においてはかなり一般的な考え方として受け入れられている。

LSACとしても，LSATを単独の選抜基準として用いることは推奨していない［3］。異なる背景や専門分野を経て志願してくる者を選考する際の指標のひとつとしての使用を推奨している。また，LSAT得点を事前スクリーニングのために用いることについても，望ましくないとしている。

3．1 アドミッション・インデックス

LSAT得点とGPAの重み付き合計点として算出されるのが，アドミッション・インデックス（Admission Index，以下AIと略）である。すなわち，

Admission Index＝A×(LSAT得点)＋B×(GPA)＋C

である。A，B，Cは定数で，各ロースクールが独自の判断で決めている。

LSACでは，各ロースクールから送られた入学後1年目の成績のデータを用いて，LSAT得点とGPAを予測変数，入学後1年目の平均成績を基準変数として重回帰分析を適用して得られる偏回帰係数(重み)を算出し，各ロースクールがAIの重み付けのための定数（A，B）を決める際の参考資料として提供している。全体の75%のロースクールがLSACのこのサービスを利用しており，LSACからの情報を基にAIの重みを決める場合が多いが，最終的な判断はロースクールに委ねられる。AIを作成するかどうか，AIを選抜の際にどれくらい重視するか，AIの算出式を公表するかどうかを判断するのも，各ロースクールに委ねられている。

今回訪問した5つのロースクールのうち，AIを重視した選抜を行っているのはジョージ・ワシントン大学ロースクールである。これは，入学後1年目の成績がLSATによって良く予測できるという調査結果に基づいている。選抜の際には，AIとそれ以外の資料（パーソナル・ステートメントや推薦状)を2：1の比率で考慮して用いる。AIの重みは，追跡調査の結果に基づき，毎年更新される。コロンビア大学ロースクールでは，選抜の際にAIを用いているが，AIの重みは公表していない。志願者にAIのみで合否を決定している印象を与える危険を避けるためである。得点化された成績以外に，勉学に対する意欲や入学後の学習の発展性などの，数値で表現しにくい因子も重視したいとのことであった。

ハーバード大学ロースクールでは，AIを機械的に利用することはしないと，志願者向けの文書で明言している。また，事前スクリーニング（いわゆる足切り）のためにも用いていない。ジョージタウン大学ローセンター（ロースクール)では，LSATとGPAを重視するものの，AIは作成しておらず，LSATやGPAの足切り点も用いない。ペンシルバニア大学ロースクールでも，LSATやGPAを重視しているが，AIを選抜資料として用いることは行っていない。選抜の際の統一基準は存在せず，どの選抜資料がどの程度重視されるかも特に決まっていない。ペンシルバニア大学ロースクールでは，LSATやGPAが選抜資料としてどれくらい有効かどうかを吟味するための追跡調査の際にはAIを用いた分析を行っているが，分析結果は内部資料としている。

このように，AIの用い方やAIについての考え方は，競争倍率の高いロースクールいくつかを見ても，学校によってかなり異なっている。LSATやGPAの重視度も，一様ではない。ただし，高倍率のロースクールにおいては，入学する学生の多くがLSAT得点やGPAでかなり高成績をあげているのも事実である。出願するロースクールを決める際に，公開されている各ロースクール入学者のLSATの25パーセント点および75パーセント点（一部の

ロースクールは非公開）を参考にする志願者も多いと聞く。

一方，LSAT 得点や GPA が高いことは，必ずしも入学許可を保証するものではない。例えば，ペンシルバニア大学ロースクールは，LSAT と GPA の段階別の志願者数と合格者数を公表しているが[4]，LSAT の成績が170点以上（上位2.3%以内）であっても，合格率は60%程度である。他のロースクールの公表結果[4]を見ても，LSAT や GPA が低くても合格している学生の存在が確認できる。これは，先に述べたように，数値化された学業成績が悪い者でも，それ以外の観点において優れていれば入学させるべきだ，という考え方の現れであろう。

3．2 学業成績以外の選抜資料の扱い方

選抜度の高いロースクールでは，LSAC 経由で送付される志願者のパーソナル・ステートメントや推薦状も膨大な量になる。今回訪問した5つのロースクールの志願者は，5,000〜11,000名と，いずれの学校もかなり多人数の志願者の選抜資料を吟味する必要がある。どのような選考プロセスが，学業成績以外の選抜資料も重視した選考を可能にしているのだろうか。

志願者の選考資料は，アドミッション・オフィスの責任者である，Dean や Associate Dean，さらには，Admission Officer（入試専門事務官）が目を通す。教官が入学者選抜にどの程度協力するかは，(1)教官全体が協力する，(2)教官がある程度協力する，(3)教官は協力せずアドミッション・オフィスに一任する，の3つの体制に分類される。

比較的 AI を重視した選抜を行っている2校のうち，ジョージ・ワシントン大学ロースクールでは，アドミッション・オフィスのメンバーが教官3名と事務官2名で構成されており，5名すべてが志願者から提出された書類に目を通すとのことである。また，コロンビア大学ロースクールでは，3名の教官が全ての書類に目を通して吟味することで，数値化されない因子も重視した選抜を行っている。3名が一致して優れていると判定した作文を書いた志願者については，AI が極めて低い場合を除いて，入学許可を与えているとのことである。

AI 以外の資料を重視するとしている3校のうち，ハーバード大学ロースクールの場合は，まず入試専門事務官がすべての選抜資料を統合的に考察して，一応の結論を出す。その結果は，教官から成る審査委員会に報告され，最終的な結論を得ることになる。通常は，7,000名近い志願者の書類を吟味するにあたって，1人の志願者の資料を2人以上の担当者が審査する。LSAT 得点や GPA で合否が一目瞭然の志願者については1人で審査をする，というような若干の簡略化は行っているが，基本的にはすべての志願者のすべての選抜資料に目を通すことを目標としている。

ジョージタウン大学ローセンターでは，AI そのものは選抜に用いていないが，学業成績の高い受験者は合格，低い受験者は不合格と判定し，その中間を待ちリストとして，待ちリストの志願者については，選抜資料を総合的に，しかも丁寧に評価する。大部分の志願者については，教官1名と入試担当事務官2名の3名で合否の決定を行う。約1割の者については，8名の教官と4名の3年生が合議して合格者を決定している。

ペンシルバニア大学ロースクールの場合は，まず Dean が志願者全員の選考資料一式を読んで吟味する。Associate Director（1名）が助言することはあるが，最終的な決定権は Dean にある。Dean は，志願者を，(1)入学を許可する者，(2)待ちリストにまわす者，(3)不許可，の3つに分類する。入学を許可するかどうか，Dean が確信を得られなかった者については，2名の学部メンバーが選考書類一式を吟味して，入学を許可するかどうかを決める。2名の意見が一致しない際には Dean が裁定したり，3人目のメンバーを加えて協議したりする。あるいは，待ちリストに回す場合もある。待ちリストは，予想よりたくさん辞退者が出た場合に，そこから補充するためのリストであるが，待ちリストの中での順番づけはされておらず，リスト全員の選考書類一式に Dean がもう一度目を通して，入学許可者を決定する。通常，待ちリストからの選考は Dean に委ねられ，学部の委員会に戻すことはしない。

このように，志願者から提出されたパーソナル・ステートメントや推薦状は，各ロースクールにおいてかなり丁寧に吟味されていることがわかる。これを可能にしているのは，米国のロースクールの出願システムである。米国のロースクールでは，“The earlier you apply, the more available places the schools will have.”という方針を基本としている。8月に入学する学生を決めるために，前年11月から3月過ぎにかけて，出願順に入学を許可するかどうかを吟味していく。約半年の間に出願締め切り日がいくつか設けられてはいるものの，5,000人〜11,000人の選抜資料を，届いた順に少しずつ吟味していくシステムになっている。出願が後になればなるほど定員の残りが少なくなるので，特別に秀でていると認められなければ入学が許可されない。すなわち，LSAT 得点や GPA が同じ

でも，出願時期によって，許可される人とされない人が出る。よって，なるべく早く出願することが推奨されている。たいていの志願者は，6月か10月あるいはその両方のLSATを受験する。これは，LSAT得点を，なるべく早く各ロースクールに通知可能な状態にするためである。なお，入学許可を得た志願者は，進学先を最終的に1校に決めるまで，各ロースクールにお金を預けて入学許可を確保しておくことが出来る。各ロースクールは，辞退者を見越して定員より多めに入学許可を出しておく。

4．おわりに

今回訪問した5つのロースクールの事例を中心に，LSATと入学者選抜についてまとめたが，異なるバックグラウンドや異なる専攻を経て出願してくる志願者を比較するために何らかの共通の指標が必要であることは，各ロースクールの担当者が共通して認めている。その上で，ロースクールで生き残ることの出来る学生を多く入学させるために，志願者から提出された材料（LSATを含めた選抜資料すべて）をどう活用するかについて工夫を凝らすことで，各ロースクールの独自性が発揮されている。

参考文献

[1] 司法制度改革審議会（2001），「司法制度改革審議会意見書」
[2] Law School Admission Council, "LSAT LSDAS Registration and Information Book 2002-2003 Edition".
[3] Law School Admission Council, "Law School Admission Reference Manual 2001-2002 for Law School Administrators and Prelaw Advisors."
[4] Law School Admission Council and the American Bar Association (2003), "ABA・LSAC Official Guide to ABA-Approved Law Schools."